

ギャラ交渉

呉市音楽家協会 作曲 寺内大輔

フリーの音楽家にとって、重要かつ難しい仕事のひとつに「ギャラ交渉」がある。しかし、音楽に関わる仕事は、なかなか金額に換算できない難しさがある。時折、「こういう場合、相場はどのぐらいなのですか？」と訊ねられることもあるが——本コラムの読者ならご存知のように——相場などというものはない。

「ギャラなんて、自分で勝手に決めれば良いではないか」という意見もある。そうかもしれない。しかし、こちらから金額を提示するのは、いつもある種の怖さがつきまとう。近年、録音物や楽譜といったコンテンツの多くがインターネット上で入手できるようになり、それらのなかには無料で提供されているものも少なくない。ボランティアで仕事を引き受ける音楽家も少なくない。こういった世の中では、人によって「高い」「安い」の感覚は著しく異なる。私が自分でいくら「適正」だと思ったとしても、相手にとっても同様に感じられるとは限らない。先方から金額を提示してくれるほうが、はるかに気が楽である。

それでも、音楽を仕事にする以上、ギャラ交渉は避けては通れない。「どの程度の仕事内容なのか」はもちろんだが、それ以外にも、「その企画の全体にどの程度の予算が確保されているのか」、「私自身その企画や仕事内容にどの程度興味を持てるか」、「締め切りまでにどの程度の時間が与えられているか」等々の要素も絡んでくる。まさにケース・バイ・ケースである——もちろん、仕事そのものについては、ギャラがいくらであろうとも妥協せず、全力で打ち込んできた。しかしながら、このような方法は、公平性が確保できないという問題点もある。様々な状況を考慮するがゆえに、同じような内容の2つの仕事で頂くギャラの金額が異なるということも生じてしまうからだ。これについて、批判的な読者もいるかもしれない。だが、それはこれまでの私にとってある程度仕方のないことでもあった。私もしばしば逆の立場、すなわちクライアントとして仕事を依頼する立場になることがあるが、必ずしも十分な予算がある時ばかりとは限らない。「企画はやりたいが予算はない」という苦しい状況のなか、企画に共感して安いギャラで助けてくれた音楽家には心からありがたいと感じてきた。そうした経験を考えると、一律に「自分の相場」を決めることができないのである。

ここまで、「ギャラ交渉」という行為を、音楽家とクライアントの関係のなかでのみ述べてきた。だが、実際はそう単純ではない。これから挙げるエピソードは、「ギャラの交渉や設定」という行為が、個人的なことに留まらず、社会的な行為でもあることをあらためて考えさせてくれる。

2013年、漫画家の吉田戦車氏による、インターネット上への書き込みが話題になった。それは、「アンパンマン」で知られる漫画家、やなせたかし氏の仕事ぶりに関するものである。やなせ氏は、晩年、全国のご当地キャラクターを約200手がけたにも関わらず、そのうちギャラが支払われたのは僅か2か所だったと言われている。吉田氏は、「あの人の『タダ働き』に甘えてきた多くの自治体とか組織は恥じる、と思いますね」、「タダで引き受けまくったやなせさんも良くなかったといえよくなかったかもしれない」と、自治体、やなせ氏の双方を批判した。吉田氏の意見に賛同する意見のなかには、「大御所がタダで仕事を引き受けるのはやってはいけないこと。大金持ちのパン屋がタ

ダでおいしいパンを配りまくったら 他のパン屋は立場がない」と、やなせ氏の行動をアンパンマンの行為に準えたものもある。

「やなせたかしの晩年は「タダ働きばかり」「甘えてきた多くの自治体は恥じろ」と吉田戦車が激怒 2013/10/18」『JCAST ニュース ビジネス&メディア ウォッチ』

<http://www.j-cast.com/2013/10/18186643.html?p=all>

吉田氏が自治体を批判したように、クライアント側が無報酬を前提としてしまうことは大きな問題を生じさせかねないが、同様の事例は少なくない。2013年の大阪市天王寺区の事例もそのひとつであり、大きな批判があった(その後、批判を受けた大阪市天王寺区役所は、ウェブサイトに謝罪文を掲載し、応募条件を改めて再募集を行った)。

天王寺区が1年間タダ働きのデザイナーを募集している件。あんまりやん。

<http://blog.factory70.com/freelancers-work-tips/no-guarantee-work-at-tennoji>

「ボランティア」——ことに「音楽」という分野には少なくないと感じるのだが——私は、これが悪いとは言わない。だが、気安く行うことには賛成しない。「私がタダでも良いと思っているのだから、タダでやって何が悪いの」という考えは、同業者—とりわけ後進の同業者—にとってはかなり迷惑である。また、場合によっては、本人の首を絞めることにもなりかねない。「以前あの人はボランティアでもやってくれたから、次もあの人に頼もうよ。たぶんボランティアでやってくれるよ」と思われるようになったら、フリーの音楽家としてはかなり厳しい立場に追いやられる。そうした影響は、やなせ氏のようないわゆる「大御所」のみならず、すべてのアーティストが意識しておかなければならない重要なことのように思える。

ギャラ交渉——これまでいつも悩まされてきたし、これからも悩まされることになるだろう。だが、がんばらなければならないし、これを読んでいる呉市音楽家協会の皆さんにもがんばって欲しい。自分ひとりのためではなく、世のため人のためにも。